

第2章 はじまり

のぼるは、目をさました。下で、お母さんがのぼるをよんでいる声が聞こえる。

「朝か。」もっと寝てたいな。

よっこいしょ。のぼるは、朝が少し苦手だ。みんながどうやって、朝、すっきり目覚められるのか、よくわからない。

「もう少し、夜、早く寝てみたら？」

「うわっ！！！」

突然、女の人の声が聞こえてきて、びっくりした。

「はは。ごめん、ごめん。まだこの状況には慣れてないよね。」

その声を聞いて、昨日のことを思い出した。

そうだった。これからは、ミシャがそばにいてくれるんだった。

そう思うと、少し安心した。いつもひとりぼっちの学校も、すこしはおもしろいかもしれない。

「そうだ、言っておかなければいけないことがあるの。わたしのすがたは、のぼるくんには見えないからね。わたしの声も、のぼるくんには聞こえないから。」

え？そうなの？

「そう。でものぼるくんが声を出さなくても、こうやって会話ができるから、大丈夫よ。」

確かに、みんなにはミシャのすがたも見えないし、声も聞こえないのであれば、のぼるが声にだして、ミシャと会話をしたら、みんなに変な目で見られるだろう。

わかった。気をつけるよ。

ミシャは、大丈夫よ、というように、うなずいた。

のぼるは、朝が苦手だ。

だから、朝はいつもぎりぎりになって起きる。だから、朝ごはんも、歯みがきも、かおを洗うのも、学校の準備も、いつもかけ足だ。お母さんの大声で、朝はうるさい。

「早くたべちゃいなさい！」

「歯はみがいたの？」

「まだ、学校の支度してないの？」

「何度言わせれば直るの??？」

家を出るところには、のぼるは、カッカしている。お母さんは、本当に口やかましいや。

「それは、お母さんのせいなの？」

ミシャがのぼるにやさしい声で問いかけた。

イライラしていたのぼるは、

「いいじゃん。どうでも。」

「まずは、そのイライラを落ち着かせることね。それから、話しましょう。」

のぼるは、いつもの通学路を、イライラとともに、ドシドシという足音をたてて、歩いていった。その足音を聞いていたら、なんだか、だんだんバカらしくなってきた。

なんで怒っていたんだっけ？

「だんだん落ち着いてきたみたいね。話せるかしら？」

話す？話すって何を？

「もちろん、今、のぼるくんが怒っていたことを、よ。」

話してなんの意味があるんだ？

「今まで、話してこなかったのね。今、とてものぼるくんはイライラしていたよね。何にそんなに怒っていたの？」

お母さんが、いつも大声を出すからだ。

「お母さんは、なぜ、大声を出すのかしら？」

うっ。それは、のぼるが起きるのがギリギリだからだ、ということのをのぼるはわかってきた。

「そうね。では、お母さんはどんな気持ちで、朝を過ごしているのかしら？」

怒っている。

「表面上では、大声をだしているし、怒っているわね。でも、お母さんは、のぼるくんが遅刻するのが心配なのではない？」

う、う～ん。そうかな。

「のぼるくんは、朝が苦手なのかもしれない。起こされるのもイヤなのかもしれない。でも、ずっとお母さんが大声をだしているのもイヤなのよね？イライラしてくるのよね？」

じゃあ、このイライラの伝染をとめるには、どうしたらいいと思う？」

早く起きる。

「それは大切なことね。でも、すぐに早く起きられるようになれる？」

無理。無理。無理！

「ふふ。のぼるくんは、正直ね。

では、朝、もう少し余裕ができるようにするには、何かできることがあると思う？」

ない！

「はは。もう少し考えてみて。」

う～ん。顔も歯も、朝に洗わなければならないし、朝ごはんも、朝、食べなきゃ、朝ごはんじゃないし！

「その調子！」

そうか！学校の準備を、ちがうときにすればいいんだ。

「いいね！では、今日、さっそく、ためしてみよう。」

え？もう？今日から？

「もちろん。それが、いい考えだと思ったら、すぐにやってみることが、コツよ。」

のぼるは、やってみようかな、という想いと、イヤ、まだやりたくないな、という想いと、両方の想いを抱えて、学校へ着いた。

「ふふ。とうとう、のぼるくんの旅が始まったわね。ちょうど、入口あたりかしら。」

ミシャは、何を言っているんだろう？どこへも行っていないし、入口なんてみえないけどな。

「いいのよ。またいずれわかるから。」

学校のげた箱から、くつを取り出す。のぼるのくつは、いつもボロボロだ。のぼるは、ふつうに使っているつもりだが、新品のくつも、すぐにボロボロになってしまう。

みんなが、「おはよう。」と友だちを見かけると、声をかけている。のぼるに、あいさつしてくれるクラスメイトはいない。みんなのあいさつを見かけると、いつも、のぼるは複雑な気持ちになる。のぼるも、あいさつぐらいできる友だちがほしい。でも、どう友だちを作っているのかわからない。もどかしいのだ。どうしていいかわからないから、らんぼうになってしまう。

「おい。」

クラスメイトの「きゅうり」がいる。もちろん、「きゅうり」はあだ名だ。彼は、細くてひよろひよろとしていて、きゅうりのように「味がない」性格なので、そうよばれていた。目立つこともなく、まわりと反対することもなく、存在感がうすい。そんな「きゅうり」を、のぼるはターゲットにすることが多かった。反抗することがないからだ。

のぼるの声に気が付いて、きゅうりが振り向いた。のぼるの顔を見たたん、とてもイヤそうな顔をした。そんなきゅうりに、のぼるは、ムツとした。まだ、何もしてないじゃないか。ムツとしたので、きゅうりのおなかに、パンチをくらわした。そんなに強いパンチではないけれど。

きゅうりが苦しそうに顔をゆがめた。

しまった。強くやりすぎたかな。でも、ぼくを見て、変な顔をするからだ。

きゅうりは、それ以上、のぼるにやられないように、教室に向かって、走って行ってしまった。

「のぼるくんは、すぐに手がでてしまうのね。」

また、ミシャだ。そうだった。いたんだった。

今までは、いつもまわりに人がいないから、ミシャがいることをすぐに忘れてしまう。もちろん、のぼるには、ミシャのすがたがいつもはっきり見えているのだが。

さっきの朝の支度のように、説教が始まるのか。やだな。

「のぼるくんは、わたしが言っていることが、説教だと思っているのね。」

そうだろ。だって、ああしろ、こうしろ、って言うじゃないか。

「本当に、わたしは、そんな言い方をしているかしら？」

だって、朝の話をしていたときだって、準備は前の日にするように、って言ったじゃないか！

「よく思い出して。それは、わたしが言ったことだった？」

ぼくに何かをさせようとしているのであれば、それは、ぼくじゃなくて、だれかが言ったことだろ？

ん？でも、まてよ。ミシャと朝の支度の話をしていたとき、ミシャは落ち着いていたな。お母さんやお父さんみたいに、「～しろ！」とどなられていないかも。

のぼるは、いつも叱られ、どなられていたので、だんだん、大声をだされることに「まひ」してきていた。大声をだされたときに、右から左へ聞き流せるように、のぼるも知らないうちに、練習していたのだ。

そうだった。ぼくが言ったんだった。

「よく思い出せたね。その調子。」

じゃあ、きゅうりくんへの態度は、どうして、そんなに攻撃的なのかしら？」

だって、きゅうりを見ていると、むかつくんだもん。

「むかつく、って？」

むかつくのは、むかつくんだよ！

「腹を立てる、ということね。きゅうりくんの何に、腹をたてているの？」

もう、教室行かなきゃ！

「話題を変えたね。あまり話したくないみたいね。もう少し、ゆっくり話せるときに、また一緒に考えましょう。」

うっ。また、話すのか……。

ミシャがそうよ、とうなずいていた。

やっと、教室に着いた。教室に着くまでに、のぼるはつかれきっていた。なんだか、今日のはつかれるな。

担任の先生がやってきた。朝の号令がかかった。

「起立。礼。着席。」

いつもの号令だ。毎日、毎日やらされるので、いつも、のぼるはダラダラやっていた。つかれているのに、立ち上がるのもめんどくさい。

「のぼるくんは、エネルギーが低そうね。」

また、ミシャがよくわからないことを言っている。

のぼるは、ミシャの言葉を無視しようとした。

「またわかるようになってくるし、時がきたら、話をするから。それに、わたしはのぼるくんと頭で話をしているのだから、無視をしようとするのは、むずかしいわよ。」

そうだった・・・

ミシャがいたずらっぽいやつでこちらを見ていた。

担任の先生が、今日の予定を話していた。

今年の担任の先生は、男の先生だ。よく言う「体育会系」らしい。お母さんがそう言っていた。のぼるには、その意味がよくわからなかった。でも、この先生は、体育の授業が大好きらしい。いつも笛を持って、はりきっている。怒ったときは、とても怖い。その時の、先生からでてくる空気は、真っ赤になる。その真っ赤な空気が、まるでモンスターのように、のぼるを食いちぎってしまいそうな勢いだった。だから、この先生には、なるべく見つからないように、のぼるはいつも細心の注意を払っていた。でも、残念ながら、この担任の先生は、のぼるのことをいつも見ている、気にかけていた。

「今日は、3時間目に書道の時間があります。書道の道具は、2時間目の終わりの休み時間に用意しておくように。」

しまった！書道の道具を全部忘れてしまった！

のぼるは、忘れ物も多い。朝、あせって準備をするのだから、忘れ物が多いのも当たり前だ。でも、もう一つ、理由があった。

予定帳を書いていないのだ。

「なぜ、予定帳を書かないの？」

だって、めんどくさいじゃん。

「でも、書かなければ、何を持っていけばいいか、わからなくなるじゃない？」

頭でおぼえているから、大丈夫！

「今日、忘れ物したんじゃない？書道の道具とか？」

それは、朝、バタバタしていたから。

「じゃあ、今日から、前の日に準備するから、忘れ物は少なくなるわね。」

うん。予定帳なんていらないよ。

「まあ、それで、ためしてみよう。」

それ以上、ミシャは追及しなかった。

ほっ。よかった。

と、思ったが、

「あ、しまった！」

「どうした？のぼる？なにが、しまった、んだ？」

「なんでもありません。」

先生は、じっとこちらを見ているが、のぼるは下を向いてやりすごした。

思わず、声のでてしまった。

ミシャは、ぼくが考えていることは、すべてわかるんだ。だから、「よかった。」と思ったことも、ミシャにはわかったはずだ。でも、今回は、ミシャはそれ以上、予定帳のことを言わなかった。

とりあえず、書道の時間をどうするかだな。お母さんに電話して、持ってきてもらおうか。ダメだ。また、怒られる。お母さん、今日、仕事だし。

う〜ん。他のクラスのだれかに借りるか。のぼるは、忘れ物をしたら、他のクラスのだれかに、借りていた。というよりも、少しおどして、勝手に持って行っていた。今回もそれで行くか。

「だめよ。勝手に人のものを取っていったら。」

ミシャが少し悲しそうな顔をして、のぼるを見ていた。

じゃあ、どうしたらいいんだよ？

「のぼるくんが忘れ物をしたのは、のぼるくんの責任なの。だから、自分でその責任を負うのよ。書道の時間、担任の先生に正直に忘れたことを話すの。」

え？あの、担任の先生に！？正直に忘れたと言ったら、どれだけ怒られるか、想像しただけで、のぼるはふるえあがった。

「そう、自分の失敗は自分に返ってくる。でも、自分の成功も自分に返ってくる。自分の行動には、その結果がかならずあるのよ。」

書道の道具を「忘れた」結果が、自分で先生に言って、「怒られる。」ということ？

「そうね。どう返ってくるかは、話してみたら、わかることだけれど。」

はあ。気がおもい。もう、帰りたい。

「いやなことから、背を向けていたら、なにも前にすすまないよ。でも、少しでも勇気をだして、正面を向いたら、きっと、自分が思っている以上に、ラクになるよ。」

そうかなあ。にげているほうが、ラクだと思うけど。

「今日とはとにかく、先生に正直に言って、忘れたことに「正面」から向き合ってごらん。ほら。わたしもそばにいるから。」

あの先生に話すときも、ミシャがそばにいてくれたら、こころ強い。さっきまでは、ミシャのことを少しうとましく思っていたのぼるは、少しはずかしくなった。

「いいのよ。だいじょうぶ。いろんな感情、気持ちがでてくることは、とても自然なことな

んだから。」

でも、そもそも、先生に正直に話せ、と言ったのは、ミシャだったんだけど。

でも、のぼるは、こころの奥底では、だれかをおどして、勝手に持っていくのはよくないことだと、充分わかっていた。だって、それをすると、次からは、その子はのぼるの顔を見ただけで、ダッシュで逃げていくが多かったから。

少しなんとかかしてみよう。とのぼるは、素直に思った。

朝の会が終わり、担任の先生が、教室からでていくところだ。

「先生。」のぼるは、えいっという気持ちで、先生をよんでみた。声が少しかすれてしまった。でも、先生はちゃんと振り向いてくれた。

「お、なんだ？のぼる？」

先生の顔を見たら、体がかたまってしまった。うまく声がでない。そもそも、なんて言おう？なにを言うんだっけ？

あせればあせるほど、頭が真っ白になっていく。

「なんだ？何かあるなら、言ってみろ。」

そのとき、ミシャが先生の横に立ってくれた。のぼるは、ミシャという味方がいることを思い出した。

そうだ！忘れ物のことを言うんだった。ミシャを見て、すこし落ち着いたのぼるは、今、何をしようとしていたのかが、すぐに頭にうかんだ。

「先生、書道の道具、忘れました。」

のぼるは、先生の反応がこわくて、下を向いて言った。

「のぼる。下を向いて言ったら、聞こえないぞ。」

少し、先生の声が大きくなった。

しまった！先生、もう怒ってる！

「のぼるくん、顔をあげてごらん。先生の表情を見てごらん。」ミシャがやさしく、のぼるに伝えた。

のぼるは、こわごわ顔をあげた。

びっくりした！先生は、少しほほえんでいる！怒ってない！

「先生、書道の道具、忘れました。」

もう一度、顔をあげて、先生の顔を見ながら、のぼるは伝えた。勇気をふりしぼっている感じだ。

さらに、のぼるはおどろいた！なんと、先生がまだほほえんでいる。

「のぼる、よく忘れ物しているだろ。でも、はじめてごまかさないで、先生に言えたな。」

てっきり、どなられると思っていたのぼるは、おどろきのあまり、声がでない。体も固まったままだ。

「忘れ物をするのは、よくない。のぼるにとって、よくない。でも、それをごまかそうとするのは、もっとよくないぞ。今回は、先生に正直に話してくれたことをほめるぞ。」

怒られるどころか、ほめられた！

のぼるには、わけがわからなかった。

「次回からは、忘れ物を少なくするように努力すること。今日は、先生の道具を貸してやるから。」

「ありがとうございます。」

自然に、のぼるの口から、感謝の言葉がでてきていた。

なんだかわけがわからず、ぼーとしながら、のぼるは席に戻った。なんで、先生、怒らなかったんだろう？あんなに怖い先生なのに。

「なぜだと思う？」ミシャが落ちついた声で問いかけた。

その声を聞いていたら、のぼるは、ずっと、こころが落ちつくのがわかった。

先生は、今までのぼるがたくさん忘れ物をしてきたことも知っていた。だから、今日は、いつもとちがって、忘れたことを正直に話したことを、先生はほめてくれていた。

「先生は、のぼるくんの忘れ物について、今まで何も注意してくれていなかった？助けてくれたことはなかった？」

のぼるは、今までのことを少し思い返してみた。

う～ん、なにかあったかな？

そういえば、よく、先生はぼくに「予定帳は書いたか？」って聞いてたな。めんどうくさいから、ずっと聞き流してたけど。のぼるは、大人の言うこと、まわりの言うことを、右から左によくながしていた。気をむけることはあまりなかった。

「でも、わたしも大人よ。わたしの言っていることは、聞いているみたいだけれど。」

そりゃ、ミシャは、そばにずっといるし、なんと言っても、ぼくの考えが読めちゃうからね！

ミシャは面白そうに笑った。

「それもそうね。」

「でも、のぼるくん、わたしの言っていることに注意を向けられるのであれば、他の大人たち、まわりの声も聞くことができるんじゃない？」

でも、大人たちは、言っていることがこまかいんだよな！あれこれ、うるさいんだよ。

「今、先生の注意の言葉、予定帳は書いたか？ってよく聞かれていたことに気が付いたわよね？それが大切な意味があったのも、今、わかったのではない？」

うん。なんか、ちょっとくやしい気持ちもあったが、たしかに、先生はのぼるの忘れ物、予定帳のことを気にかけてくれていた。ただ、のぼるが、それに聞こえないふりをしてきたのだ。

「忘れ物のことは、先生とも一緒に考えてみるといいわね。今回、怒るだろうと思っていた

先生が、怒らなかったのはどうしてだったと思う？」

だから、正直に忘れたことを話したから。

「そうね。自分の失敗を、ちゃんと自分で認めたからだね。」

あ、そうか。ミシャが言うとおりに、失敗をかくそうとしないで、にげようとしてしないで、むきあったからか。こういうことが「向き合う」ってことか。

「そのとおり！自分の失敗に向き合うことは大変なことだけれど、でもこうやって向き合って、それを積み重ねることが、これからののぼるくんには、とても大切なことよ。」

のぼるの中で、じわじわと、あったかい感覚がでてきた。はじめての感覚だった。